第５課　パウロの回心

【暗唱聖句】

「すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である」使徒9：15

【今週のテーマ】

今週はパウロの回心について学びます。キリスト教会の迫害者から伝道者へとどのように変えられていったのでしょうか。

【日曜日・教会の迫害者】

パウロはギリシャ語を話すユダヤ人で、ローマの市民権を持っていました。生まれはキリキア州の首都タルソスでしたが、エルサレムに来てファリサイ派のガマリエルの下で学んでいました。熱狂的な性格の持ち主であったために、教会に対し率先して迫害していました。

「実は私自身も、あのナザレの人イエスの名に大いに反対すべきだと考えていました。そして、それをエルサレムで実行に移し、この私が祭司長たちから権限を受けて多くの聖なる者たちを牢に入れ、彼らが死刑になるときは、賛成の意思表示をしたのです。また、至るところの会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒涜するように強制し、彼らに対して激しく怒り狂い、外国の町にまでも迫害の手を伸ばしたのです。」使徒26：9～11

パウロはキリストあるいはキリストの教えは、「ユダヤ人にはつまずかせるもの」（第一コリ1：23）であったと述べています。それはキリストの教えが伝統的な自分たちの考えや教えとは異なっていたということもありますが、申命記21：23に書かれてあるように「…木にかけられた者は、神に呪われたものだからである…」との御言葉から、十字架にかかって死なれたキリストは神様に呪われたものであり、メシアであるはずがないと理解していたと思われます。サウロ（パウロ）はキリスト教徒を捕まえてエルサレムに引っ張ってくるために、200キロも離れたダマスコまで行く許可を大祭司に求めました。

「さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった」使徒9：1，2

サウロは最高法院から任命され教会を弾圧するために遣わされたわけですが、そこで使われている言葉から使徒という言葉が派生していくのは興味深いところです。これほどまで熱心なキリストの迫害者だったからこそ、回心した後のパウロは命をかけてキリストを伝えるものとなっていったのでしょう。

【月曜日・ダマスコへの途上にて】

パウロの劇的回心の光景が使徒言行録の9章に描写されていますが、それは神様が直接介入された実に驚くべきものでした。

「ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした」使徒9：3

パウロがダマスコに近づいたとき、突然天からの光が周りを照らします。その光はパウロだけでなくそこにいたすべてのものをも包み込みました。しかし、この光によってパウロだけが目が見えなくなります。そしてパウロは神の声を聴きます。キリストは何を見、何を聞くのかが大切であることを語っておられましたが、パウロは今まで見ていたものが見えなくなり、本当に見なければならないものを見るようになるために目が見えなくなったのです。そして、いままで聞いたことがなかった神の声を聞き、本当に耳を傾けるべき言葉がなんであるのかを悟るのです。こうしてパウロは回心するのです。ではパウロはこのとき、光の中で何を聞いたのでしょうか。それは次のように言葉でした。

「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」使徒9：4

パウロはクリスチャンたちを迫害することは、神様の目に正しいことであると確信していました。ところが、天から主の声が聞こえ、その声は「なぜわたしを迫害するのか」というのでした。つまり、主はクリスチャンをご自身と同一視しておられたのです。天から聞こえる声の主を知りたくて、パウロが「あなたはどなたですか」と尋ねると、衝撃的な答えが返ってきます。

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」使徒9：5

天からの声は明らかに主なる神様の声でしたが、その声の主は何とイエス・キリストだったのです。どれほどパウロにとって衝撃的なことだったでしょうか。しかし、彼はさらに驚くべき言葉を聞くことになるのです。それは「起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」（使徒9：6）という言葉でした。主なるキリストは迫害者であるパウロを裁くことをせず、なすべきことをあるからそれを知らせようと言われたのです。パウロはこのように使命が与えられたからこそ、回心と同時に立ち上がることができたのです。

【火曜日・アナニアの訪問】

パウロの使命はアナニアを通して与えられることになりました。これは主の働きは一人で行うものではなく主を信じる兄弟姉妹と共に一つとなって行っていくことが主の御心です。しかし、これまでクリスチャンを迫害してきたパウロが、教会の人たちと一つになって主の働きを行うことができるでしょうか。一人で伝道していったほうがどれほど楽だったかわかりません。しかし、パウロは目が見えない状態で三日間、食事もとらずアナニアの到着をじっと待ったのです。

神様に示されてアナニアはパウロのもとまでやってきたとき、「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです」（使徒9：17）と言いました。この言葉で注目したいのは、パウロのことを「兄弟」と呼んでいることです。パウロがどれほどひどいことをしてきたか、どれほど恐ろしい人物であるか、重々承知の上でこのように語ったのは、主がパウロを器として選んだと言われたからです。

パウロは自分が迫害してきた者から「兄弟」と呼びかけられたとき、どんな気持ちがしたことでしょう。そして優しくアナニアの手が自分の頭の上に乗せられます。そのぬくもりを感じながら祈られると、目からうろこのようなものがとれ、目が見えるようになるのです。これは単に目が見えるようになったこと以上に、今まで正しく見ることができなかった神様の世界がはっきり見えるようになった瞬間でもありました。

【水曜日・パウロの働きの始まり】

パウロは回心あと、すぐにエルサレムへ戻ることはせずアラビアに下り、そこで静かに祈りと瞑想に時間を費やしたようです。

「また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした」ガラテヤ1：17

エレン・G・ホワイトの言葉を借りるなら「パウロは砂漠のさびしいところで、静かな研究と瞑想の時を十分に得た」のでした。パウロは強烈な回心のあと、これまでの人生を振り返り、これからの人生に思いをはせながら、神様の導きを仰ぐ霊的な時間が必要だったわけです。そして、その後まるで別人になったように力強くイエスはメシアだったということを証し始めます。教会の人たちは本当に驚いたことでしょう。また、元仲間だった人たちもパウロの変わりように驚いたことでしょう。ダマスコ途上で主の光を見、主の声を聞いたのはパウロだけではありませんでしたが、パウロ以外の人たちも同様に回心したとは書かれてありません。同じ経験に与っても、その後どのような行動をとるかは人それぞれなのです。やがてパウロを殺そうと画策するものたちも現れます。

【木曜日・エルサレムへの帰還】

パウロは回心後エルサレムに帰ったのは、なんと3年も後のことでした。

「それから三年後、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しました」ガラ1：18

パウロがエルサレムに戻ったのは、ペテロと知り合いになろうとしてと書かれてあるのが興味深いところです。しかし最初のころは「弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れ」られました（使徒9：26）。そこで間に入ったのがバルナバでした。

「しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した」使徒9：27

バルナバの影響力の大きさもあって、パウロはしだいに認められるようになっていき、やがて使徒たちとも自由に行き来をするようになります。そしてギリシャ語を話すユダヤ人たちと議論するようになりますが、反感を買い、命を狙われるようになります。そこで兄弟たちの協力を得て、パウロはカイサリアから故郷のタルソスに向かわせ、そこで伝道旅行を開始するまで数年間を過ごすことになります。このことに関して、主ご自身がパウロに語って次にように語っていました。

『急げ。すぐエルサレムから出て行け。わたしについてあなたが証しすることを、人々が受け入れないからである。』・・・『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』」使徒22：18，21

こうして福音は全世界へと広がっていくことになるのですが、すべては主のご計画の中にあることがわかります。